

2018年05月25日 1面

文字サイズ 小 中 大 [ブックマーク](#) [印刷](#)

地域を興す－長大の挑戦・下ノ地域が潤うより良い未来描く



アシガ川発電所の取水堰サイトで
将来展望を語る永治社長と宗広部
長（手前）

長大がブトゥアン市で展開するプロジェクトは電源と水資源の
開発、豊富な農林水産資源を生かした第1次産業（ウナギの養殖
と加工、稲作と精米事業など）の確立から始まった。

成功例の一つが、長大の出資するSPCが運営する養鰻事業。
養殖池は創業時点の2カ所から5年で27カ所に拡張され、今は
年間200万トンを出荷する。隣接地には食品衛生安全管理シス
テム（HACCP）認証を取得した加工工場も稼働する。

同社の山脇正史取締役兼専務執行役員は「第1次産業を興し、
電力や水をつくり、道路などのインフラを介して点から線、面に
広げる」と、地域開発プロジェクトの今後を見通す。優秀で廉価な労働力をセールスポイントとし
て、工業団地（タギボ川中流域に計画中）に日本の製造・加工業を誘致し、原産品に付加価値を与え
て輸出する。工業団地で使う電力（小水力・バイオマス・風力・太陽光発電）の開発とともに、加工
品の出荷拠点となるミンダナオ島のマサオ港やナシピット港を拡張。工業団地と二つの港を結ぶ産業
道路も建設する。

17年10月に日本とフィリピンの首脳が公表した「カラガ地方総合経済開発」（13案件）の総
投資額は1400億円。工業団地は80億円、産業道路は500億円（アグサン渡河架橋を含む）、
マサオ港とナシピット港の拡張には300億円の投資が計画されている。宗広裕司事業推進本部事業
企画部長は「アグサン渡河架橋は18年度中にFS（事業可能性調査）に入る。（橋梁に）1年遅れ
で港湾もFSの準備に入りたい」と話す。工業団地に鉄道線路を敷設し、貨物用ターミナルを置く構
想も浮上する。

アシガ川小水力発電所に続く電源開発は、もみ殻を使ったバイオマス発電所と風力発電所の二つが
動く。バイオマス発電は本年度中に2国間クレジット制度（JCM）の提案を行う。風力発電事業は
候補地に風況観測ポールを設置。これから1年をかけて現地調査を実施し、事業性を判断する。

同市で加速する民間主導の地域開発は、財政状況の厳しいフィリピンの地方行政の間でも注目度
が高まる。タギボ川上流部の上水供給施設の式典に詰め掛けた近隣自治体の関係者を前に、永治泰司社
長は「どんな開発も地域が潤うことが最優先。かつて林業やエビの養殖業で栄えたブトゥアンで当社
が行うのは都市再生の取り組みだ」と力説した。長大は新たな事業として、風力発電所の建設候補地
である市北東部でのホテルを含むリゾート開発を模索し、発電用風車を造るためのアクセス道路につ
いて、観光道路を兼ねて整備する案を市に提案した。

「地方が元気にならないと国は良くならない。日本に持ち帰った時に『都市再生の長大』の名称で
呼ばれるようになってほしい」と未来の企業像を描く永治社長。海外を舞台にした長大の挑戦は続
く。（編集部・富本伸一）

閉じる

記事ID : 3201805250102